

第35期第4回長崎県社会教育委員の会議 議事録

開催日時	令和元年9月6日(金) 14:40~16:30
開催場所	ミライon図書館(長崎県立長崎図書館)
出席者	<p><b>【社会教育委員】</b>  江頭委員長、稲田副委員長、郷野委員、菅委員、野間委員、久保田委員、松尾委員、迎委員、中野委員、有川委員、福田委員、梅木澤委員、藤田委員、武原委員 計14名</p> <p><b>【事務局】</b>  (生涯学習課)  山口課長、棕本参事、五十嵐係長、山崎係長、土屋係長、金丸指導主事、矢川参事、山下指導主事  計 8名</p>
(1)開会	開会挨拶
(2)委員長挨拶	<p>今日は、社会教育施設に関する協議ということで、ミライon図書館の視察をしていただいた。この図書館は、構想は13年前からスタートした。立山にあった県立図書館の老朽化にともない、新しい図書館をどのようにするか、ずっと議論を重ねてきた。最初の議論は、内容をどのようにするかということより、建物を長崎に置くか大村に置くか、ということだった。非常に厳しいやり取りの中で議論を重ねており、今回の開館にあたり感慨深いものがある。</p> <p>10月5日には、開会記念式典が開催されるとのこと。社会教育施設でもあるので、みなさんを代表して式典に参加させていただく予定。</p> <p>図書館といえば読書。長崎県の読書の計画について、生涯学習課に事業説明をお願いする。</p>
(3)事業説明	<p>( 生涯学習課 事業説明 )</p> <p>○第四次長崎県子ども読書活動推進計画及び関連事業について</p>

(4) 意見交換

・生涯学習課職員によるビブリオバトル大会（実演）

（委員）

ビブリオバトルは子どもが、5分間の中で、伝えたい言葉を集約し、言葉を選び、どのように伝えるかなどいろいろなことを考えて発表するというので、とても良いことである。今回の実演を見て、5分でまとめるのは、大人でも難しいと感じた。中学や高校でも授業で取り組むことは国語力を高める意味でもよいと思う。

（委員）

自分も本を選ぶときは、広告を見たり、書評を見たりして興味を引かれるものを選ぶ。ビブリオバトルでは発表者を通じて、本を知る事になるので、選択する幅が広がる。発表者は、クラスや学校で発表するために一生懸命考えて技量があがる。

ビブリオバトルをみると、ほとんど図書室にある本から選んで発表することが多いが、なかなか他の生徒の反応がいまひとつだったりする。朝読書も、図書室から面白そうな本を選んできて読んでみるのが、最初の数ページのみを読んで長続きしないこともある。ビブリオバトルでは、読んだ人が本の魅力を伝えてくれることによって、読みたいと思う人を増やす、子どもの選択肢を広げることができる。今は中学校がメインで活動しているが、小学校高学年まで広げていってもよいのでは、と思う。

（委員）

中高校生になると、本の選び方として自分の目的に応じた本を選ぶようになる、とのことであったが、ビブリオバトルの投票でも自分の興味・関心の方ある本を選ぼうとするのではないか、そのような中で、投票する人が今まで興味・関心がなかった本を発表者が紹介するときに、本の内容の面白さをどのように伝えるか、興味・関心を引かせるかによってかなり投票に影響してくると思う。

（委員長）

ビブリオバトルに課題はあるか？

(生涯学習課)

投票者が今までふれてこなかったジャンル等の本を発表者が紹介する時に、いかに相手に本を読ませたくなるかということが大切になってくるが、それは、発表者の意欲だったり、本に対する想いだったりする。そこを頑張ってもらうのが、ビブリオバトルの腕のみせどころ。大会になると、発表者は、投票者によって選書を変えてくる。選ぶ本もさまざまで、絵本や広辞苑を発表した人もいた。

(委員)

ブックトークとの大きな違いは？ブックトークの場合は、本を紹介した後に、必ずその本を手にとれるようにしておくが、ビブリオバトルの場合はどうか？

(生涯学習課)

ビブリオバトルはあくまでも、本の紹介のみ。

(委員)

紹介された人がすぐ本を手にとれないというところに課題を感じた。

(委員長)

ビブリオバトルの最終の目標は、伝え方・表現力のスキルを学習するところにあるのではないかと思う。

(生涯学習課)

文科省が示すビブリオバトルの目的は、「主体的、対話的で深い学び」であり、ねらいはそこにある。さきほど委員長が言われたとおり、ビブリオバトルでは、いい本、というよりは示し方・説明が上手いことに左右され、本の良し悪しではない。高校生のビブリオバトルを見ても、音楽を使ったり映像を見せたりすることもある。ビブリオバトルの本質は、本を読むだけではなく、「表現する・伝える」というところにある。

(委員)

仕事で中学生と関わっている。確かに今の中学生は本を読むことが少なくなっていると感じる。仕事上で関わる中学生は不登校気味だったり別室登校の子だったりするが、その子どもは本をよく読んでいるようだ。教室でぽつんと難しい本を読んでいることもあり、本のことを聞いてみると、とても楽しげに饒舌に本を紹介してくれる。そういう子どもが、コミュニケーションスキルを上げるとか、活躍の場を作る意味でも、例えばそういう子どもだけでビブリオバトル大会を開くなどしたら、人と関わるスキルがあがるのではないかと思った。

(委員)

これから社会にでることになる高校生は、自分の考えを自分の言葉で伝えることが必要になる。例えば、自分と興味が同じ人ばかりではなくて、自分と価値観が違う人に分かりやすく、どう伝えるかという力を育む場であると考えている。ただ単に読書を進めるだけではなくて、読書を通じてこれから必要になってくる力を身につけるという大事な活動だと思っている。

(委員)

高校生の大会をみたことがある。どの子も上手に発表していたが、選ばれたのは話術に長けていてパフォーマンス力がある発表者だと感じた。中高生は特に。ちょっとそこが懸念材料です。ビブリオバトルの表現力・伝える力を身につけさせるという意義については、とても有効な活動だと思うが、バトルというからには、誰かが選ばれて、誰かが選ばれない、という結果がでるところについて、教育的配慮を踏まえて実施する必要があると思う。

(委員長)

何を目的にやるのか、ということをはっきりさせておかないと、見た目の派手さ、例えば本そのものに優劣があるわけではない。その本の良さをどう伝えていくか、というところに重きをおいた活

動となるわけです。思考力や判断力とか表現力を培っていくためのツールとして扱い、その結果として本の面白さが伝わっていけばよいのであって、本質を間違えないようにしないと、ただ競うだけの内容だと長続きしない。真の目的をしっかりと抑えておかななくてはならない。

(委員)

ビブリオバトルは、チャンスの一つであると思った。

推進計画でひとつ質問。学校に司書教諭がいるのといないのでは違うと思うが、司書教諭は全部の学校に配置しているのか、今後計画はあるのか？

(生涯学習課)

司書教諭は基準があって、一定規模の学校に配置されるようになっている。それ以外のところに必置ではない。学校司書は配置率が、平成30年度で84.7%となっております。配置校は小中学校で420校。市町によって独自で配置しているところもある。

(委員)

壱岐市は、22校ある中で、自分が司書として関わったときは2名しかいなかった。今は4名。4名の配置ではほとんどの業務はできない。

(生涯学習課)

実態でみると、2、3校に1人くらいが多いのではないかと。

(委員)

読書活動の推進について、自分は子育ても終わり、今は祖父母の役目をしている。現在娘と同居している。孫は5歳と1歳8ヶ月の女の子。1歳8ヶ月の子が、本が大好きで、本を読んでもくれと持ってくる。忙しいときでも、せっかくだからと思って本を読んであげますが、何度も何度も読むうちに、次のページの場面を覚えていて、台詞を話したりする。何十回も読まされるが、本を読んでいるときに

孫がすごくいい表情をする。子どもにとって、本はこんなに楽しいんだなあと感じる。本によって言葉が増える。本によって、彼女の世界が広がる感受性も育っているのを実感する。母親には本を持っていかない。母親が忙しいから。

母親は勤めから帰ってくるとやることがいっぱいある。見ていると時間に余裕がないのはわかるが、親子にとって、本を読んでやる時間というのは、とても将来に大事な時間と感じているので、お母さんが忙しくしている時間がどうにかならないかと、自分にできることを考えている。

(生涯学習課)

私達も、そのことは重視している。

ただ生涯学習課でできることとして考えた時に、生涯学習課ができることが、ボランティアである。ボランティアは県内に5000人いるので、各地で研修会を行い、こういうふうを読んで行きましょうとか、こういう本を紹介しましょうとか働きかけを行っていけば、できれば保育園や幼稚園、小学校に読み聞かせの重要性を伝えていく活動をおこなっている。本来であれば家庭で本を読み聞かせをしてもらうことが重要だが、そうでない子も学校等で本と出会うことができる。

(委員長)

第四次計画の中に家庭における取組みで「家族10分間読書運動の推進」とあるが、これができると家庭でどんなに忙しくても10分間は子どもと向き合い、本を読みましょう、ということだと思うが、こういう計画はなかなか成功することが難しい。具体的にどのような進めていこうとしているのか？

(生涯学習課)

10分間読書は、スローガンとして掲げていくしかないと思っている。現実的に家庭に入っていくことはできない。ただ、私達の施策として市町の教育委員会やボランティアに施策を理解していただき、広めていってもらいたいと思っている。

(委員)

乳幼児の読書の格差という話があったが、今はブックスタート事業で、2～3冊検診にきた乳幼児に配っている。しかし、サークル等で話を聞くと、忙しくて本を読んであげる時間がないとか、どのように読ませてやっていいかわからない、という声を聞く。本を配るときに図書ボランティアが、本の読ませ方を教えてあげたりする市町もあるが、それが伝わっていない。もらった絵本は、紙のおもちゃになっているだけ、ということもある。せめて、母親が育児休業の間は本を読んであげてもらいたい。また、未就園児が、地域に入って地域のサポートを受けられるようにできたらいいなと思う。

(委員長)

市の外部評価委員をしているが、そのような話は私も聞いている。行政は、予算を組み数値目標をつくるが、ブックスタート事業においても、配布部数の目標値しか設定することができない。本当は、配布した後、子どもが本の面白さと出会うことができるかが大事であり、それが課題である。小学・中学時代に本を読んでいない子どもが大人になって本を読むということは難しいと思うので、乳幼児期の段階から家庭の中で、本と触れ合う機会を持つことが大切。行政は家庭の中までは入ることができないが、いろいろな機関と協力しながら、進めていって欲しい。一日5分、一日10分、たかだか5分、10分でも、1年続ければどれだけの時間となるか。議論をしていくことが必要。

(委員)

平成30年度の中学生の不読者率が0.1%ということであるが、1000人に1人ということである。高校生になると、11.9%ということで、これは、1000人のうち119人ということになる。119倍の増加という大きい数字であるが、県としてはどのように考えるか。また、普通校、実業系の高校等の種別で差はあるか？対策はあるか？ネット書籍は、読書率に含まれるか。

(生涯学習課)

県内の中学から高校の率を比較した場合、とても増加しているように見えるが、同じ高校生で全国と比較すると、全国が55.8%で約2人に1人という結果に対して、長崎が11.9%なので、その結果をどうみるかということ。朝の読書活動やビブリオバトルなどの活動が少しずつ浸透してきて、効果がでてきているのではないかと思う。高校生は、勉強や活動の幅、世界も広がり、本に費やす時間も少なくなってくるため、読書を強要はしない。校種別のデータは持ち合わせていない。ネット書籍は、読書に含まれる。

(委員)

高校生は読書の時間が少ないとのデータだったが、それと比例して多くなってくるのが、ネットに携わる時間が多くなる。「家族10分間読書運動」の推進とのことだが、10分スマホを実践できているかという、10分以上検索したり、動画をみたりSNSをあげたりしているはず。保護者へ「本を読んであげてください。」と呼びかけていくことはもちろんなのですが、乳幼児期の子ども達に、スマホやネット環境を与えている家庭がすごく多く、子どもにネットを与えることによって心身にどのような影響がでるのか、しっかり伝えていくことが大事。それを親に理解してもらえれば、10分スマホを10分読書に変更しようと考えてくれる親もいるかもしれない。

(委員)

以前、学校現場にいたときに、とてもよく本を読み、発言力もすばらしい子どもがいた。その子が小学校にあがり、部活や学習塾に通うようになり、中学校では本をほとんど読まなくなった。かたや、幼稚園・小学校では本にまったく興味を持っていなかった子が、中学校では「まんが日本昔話」に興味を持ち、暗記するまで何度も読み、そこから歴史が好きになって、成人しても本を読み続けるようになった。本に出会う機会、持続性は個人の状況によって変わるので、高校生の不読者率があがるのも、納得できる。



本を読まないといって悲観する必要はない。ネット・SNSにはまわっていても、そこからネット業界等ですばらしい技術をもったエンジニアもうまれることもある。

(委員)

子どもが本を読むようになるために、図書ボランティア等の民間団体等の資質向上などが挙げられているが、どんなに本を読むのが上手なボランティアさんがいても、子どもが「ああ面白かった」で終われば、次に繋がらない。以前、「古文の伝道士」といわれている方で教育委員会から派遣されてきた方がいらっしゃったが、子どもの前で、図書室にある本を並べて早口にまくしたてるように本を語っていて、子どもはその本の世界に惹きこまれ、図書室にその本を借りて押し寄せたことがあった。ボランティアさんも、ただ上手に読むだけではなく、子どもがその本を読みたくなるような読ませ方に工夫がいるのではないか。そのようなことを研修していただけないか。そうすればもっと、こどもは本を読みたくなると思う。あと、小学生は賞状や記録が好き。以前いた学校では、100冊読んだ人、200冊読んだ人、と名前を廊下に掲示するようにしたところ、生徒数490人のうち、年間400冊読んだ子が3人、300冊が十何人、200冊が二十何人、100冊が三百何人といった。小学生に評価すること、表彰することには有効だと思う。何冊読んだら認定証を発行するなどしたら、子どもが読書好きになるきっかけになるのではないかと思う。

(委員長)

第四次計画の方策と主要な取組については、本日説明していただいたが、多くの委員にご意見をいただき、数字の読み方も含め、具体的にどういう対策や戦略をたてながら、本を見続けることができる子ども達をどのように育てていくか、ということを実施の実現の部分で考えていただきたい。現在、学校における朝読書の普及率ほどのくらいか？

(生涯学習課)

70%ぐらい。朝読書をやってない学校もある。また、毎日ではなく、週に2日や3日のみ実施している学校もある。

数値でいうと、小・中学校それぞれに週3回以上、全校で一斉に読書活動をしている学校は、平成26年に小学校は65%だったのが、平成30年は33.7%となっている。中学校では平成26年は93.2%だったのが平成30年は82.1%高等学校は94.5%だったのが92.7%ということで、若干率が下がってはいるものの、中学、高校では朝読書率は継続できている。小学校は低下している状況。

(委員)

朝読書活動で読んだ本は、読書率に含まれるのか？含まれるなら、小学生の不読書率0.1%という数値はどのようなケースか？

(生涯学習課)

不登校等で、学校にいない子どもなどが想定される。

(委員長)

では、「本を読んでいる」というよりは、「本を読まされている」子どももいるということか。

(生涯学習課)

そうなる。

(委員長)

今後、受動から能動に、どう展開していくかということと、読書の質をどう変えていくかということが課題になると思う。

(委員)

先日行われた佐々町の社会教育委員会において、佐々町版子ども読書推進計画が策定されたとのことでパンフレットをいただいた。

各市町の推進体制の状況はどのようになっているか？2.3日前に

地元の図書館に行って話を聞いてきたが、やはり町、学校、健全育成会、PTAと町をあげて推進体制を整えてやらないとできないことだと思う。それぞれの市町の推進体制はどのような状況であるか？

(生涯学習課)

第3次計画策定時は、21市町のうち10市町がこども読書推進計画を策定していた。47.6%である。終了時の平成30年度には16市町、76.2%となっている。まだ計画を策定していない市町もあるというのが現状であるが、策定している市町においても読書関係者に浸透しているかといえそうでないところもあるため、県としても研修会等で各市町に出向くときなどに、計画について紹介してもらったり、説明したりしている。

(委員長)

県は計画を作っても、実際に動かすのは市町の教育委員会だったり学校であったりする。生涯学習課は施策を強制できる部署ではなく、あくまでもお願いベースである。市町にいかに有効に働きかけるかが必要となる。そういう意味では、各市町の社会教育委員に動いていただきたいと思う。いろんな角度から、生まれる前から、生涯学習として読書に親しむためにその時期その時期に必要な関わりを子どもが生きる時間、場所と出会った人達のなかでどう育っていくかということが課題となる。ぶったぎった施策ではなくて、生涯学習という視点での施策をどう展開していくかが大事。

(委員)

自分のことを思い起こせば、子どもが小さい頃は、その時間が一番楽しく、子どもの笑顔を見られて、お互いの温かさを感じる事が出来ていたことを思い出した。逆に今の世の中はそのようになっていないことを実感した。今、常設型の通いの場を川棚町に立ち上げようとしており、自由に来ていただいて、絵本についても、いろんな方が読む人、聞く人になって利用してもらえそうなあたたかい活動もできればいいなあと思っている。

6)閉会	<p>(委員長)</p> <p>先に出された中央教育審議会の答申の中に、これからの社会教育施設に求められる役割という項目がある。その中に図書館、博物館、公民館などの、社会教育施設は、これからの時代、地域の人達が集まる拠点だったり、レファレンスの充実で地域の求めるものがすぐ提供できるなど、新たな役割を担い、地域を元気にしていく拠点となっていかなければならない。中教審の答申が5項目、6項目示されている中で、答申に沿った施策を進めていかなければならない。</p> <p style="text-align: right;">16時30分 会議終了</p>
------	--